

縁を生かすその2

2021. 1. 19

昨日の『縁を生かす』を読んだ方の中で、どのくらいの方が涙を浮かべたであろうか。あるいは、泣いてしまったらうか。

私は、この『縁を生かす』を読むたびに涙が出てきてしまう。皆さんはどうであろうか。以前、初任研や5年研、10年研の国語講座で配布していたものである。初任者でも涙ぐむ方がいる。5年研になると、涙する方が増える。10年研になると、ほとんどの方が涙を浮かべるか、ハンカチを取り出して泣いている。ところが、10年研の研修者の中に、涙が出てこない方がいるのである。私は、こういった先生は心配になってしまう。

以前、たまたまある本を読んでいて、この『縁を生かす』に出会うことができた。隣の高校国語担当指導主事にも紹介した。すると、その方はパソコンで打ち『縁を生かす』をA4判2枚の一太郎データにしてくれた。表紙もつくっていただいた。最初の表紙には、「高校国語講座」とあった。この方は、高校国語講座で研修者に配布しようと考えたのである。私は、ちゃっかりデータをいただき、小中の国語講座で配布するようにした。したがって、小中高の国語の先生方で、『縁を生かす』で泣いた方はたくさんいるはずである。

研修者には、この『縁を生かす』をずっと取っておき、「何年かに1回でも、あるいは苦しく辛くなったときにでも読んでください」と言っていた。やはり、この『縁を生かす』を読むたびに泣ける教師でありたいと思う。また、そういった教師を育てていきたいと思う。

梁川高校は生徒への手厚い指導が特長である。生徒と先生の距離感が近い。先生方は、生徒の話聞く機会が多い。それでも十分とは言えない。十分かどうかは、生徒が決めることである。生徒との距離が近く、話を聞く分、生徒のことがよくわかるようになる。

生徒の家庭環境や友人関係など、生徒一人一人が背負っているもの、抱え込んでいけるものを理解しながら指導に当たるようになる。それが生徒に寄り添うということだろう。高校生なのだから、自分で解決しなければならない部分もあるだろう。だが、自分一人ではどうにもならない環境もある。そういったときに、そばに寄り添ってくれる存在があるかどうかは大きい。梁川高校の先生方は、そういった存在になろうとしている。

『縁を生かす』の先生ではないが、「高校版『縁を生かす』の先生」といったところだろうか。学校の先生というと、授業で教えることが本務である。だが、授業の前に、生徒のためにやるべきこと、やらなければならないことがある。それができて、初めて、その生徒にとっては授業が成立するようになる。

今年も冬を越え、3月1日には県立高校の卒業式を迎える。そして、4月になると、また数多くの新たな出会いが待っている。生徒の数だけドラマが生まれる。ドラマとともに教師として泣けるのは素敵なことである。梁川高校の生徒にとって、先生方との出会いが“縁”であることを望む。